

監修の序

最近のMRI装置の進歩は著しく、撮像技術法が多様化しており、MRIを専門としない放射線診断医にとっても理解が煩雑なものとなっている。また、一般の臨床医がMRI検査を依頼するにあたり、知りたい病変を描出するのにどんな撮像法を選べばよいのか、また、得られた撮像画像は何に注意して読影すればよいのか容易ではなくなっているのが現状である。一般の臨床医や放射線診断医に求められるものは常に患者の臨床情報と臨床所見から適切な画像診断法を選択し、的確な診断を行い、治療に結びつけることには変わりはない。

高齢化社会にともない、糖尿病による慢性腎不全患者、高度な石灰化を伴う心・血管疾患が近年、著しく増加してきており、CTにかわりMRI検査の重要性が増してきている。糖尿病患者や透析患者の下肢閉塞性動脈硬化症では重度の石灰化のため造影CTA (CT angiography) を施行しても、下肢動脈の血流評価はほとんどできない。非造影MRA (MR angiography) の撮像技術の進歩は著しく、下肢閉塞性動脈硬化症に対する治療の適応や術後の経過観察ができるようになった。また、MRIは重症下肢虚血に合併する感染による骨髓炎、筋膜炎などの付随所見を直接描出でき治療方針を決めるうえで欠くことのできない検査法となっている。

本書は一般の臨床医、研修医、放射線技師を対象にMRIの基本的な撮像法を実際の症例を例にあげながら撮像画像の見分け方や読影時の注意点、各疾患に対する撮像法の有用性をQ&A形式でわかりやすく解説している。また、CTと比較し、MRIの利点と欠点についても触れ、一般臨床医が画像検査をオーダーするのに参考となるようになっていく。第0章ではMRIの難しい専門用語を避け、MRIの基礎と一般的な撮像法をわかりやすく説明している。第1章の頭部から第8章の血管領域までの各領域においては日常よく遭遇する疾患を選び、撮像法と診断法、MRI診断に必要な解剖や病期分類を図示しながら解説し、誰もが容易に理解しやすい内容となっている。本書は一般の臨床医、研修医、放射線技師を対象としているが、放射線科診断医なら誰でも数時間で一読でき、「いまさら聞けないMRIの基本」をもう一度、再確認するのにも便利である。ぜひ本書を座右の書として気軽に日常の診療に役立てていただきたい。

2014年3月吉日

日本赤十字社医療センター放射線科
山田哲久